

試みる人へ

小学生の時に、母方の祖母からインドを独立に導いたガンジーの話を何度も聞かされた。その頃の私には、まだ話してもらった内容を十分に理解することができなかったが、ガンジーは断食をした人、そして非暴力を唱えた人といった、漠然としたイメージが残った。

その後、思春期になって、私は、映像に記録されたガンジーの動く姿を、はじめて目にした。古いモノクロの粗い映像の中に、糸車を回すガンジーの姿や、小さな器を手に大勢の人々と塩を求めて海へと歩く、ガンジーの姿がそこにあった。

その頃の私は、子どもの頃に祖母からガンジーの話を聞かされた頃より、多少は歴史も学んでいたので、当時のインドが大英帝国の支配下にあったことや、自由や独立を求めた人々が、強大な武力によって激しい弾圧を受けていたことなども知っていた。

だから、はじめてそれらの映像を目にしたときは、本当に驚いた。帝国の強大な武力に対して、糸車や塩で？

圧倒的な非対称への驚きと同時に、何とも言い難い、心の底から湧き上がってくるような感動があったのを憶えている。

こんなことが本当に起きたんだ！

ガンジーはこんな凄いことを試みた人だったのか！

私の脳裏には、汽車がもくもく煙をあげ、波打つ田園を走り抜けるゴッホの絵を背景に、ガンジーの話をする祖母の姿があった。

ガンジーが実践した非暴力は、人々を真に創造的な生き方へ導くものではなかったのか。彼は偉大なアーティストだったのではないかと、思うようになった。

非暴力のエネルギー

ガンジーの話をしてくれた祖母は、その時もうひとり印象的な人物の名を挙げていた。それは、スターリンだ。

スターリンは、多民族をまとめ広大な国土を統一し、ソ連という強大な国家を作り上げた人物だと、教えてもらった。

祖母が、このふたりを並べて、わたしに語った真意は分からないが、ガンジーとスターリンを、世界を変えた代表的な人物として教えてくれたのだろう。

しかし、今になって、この二人の対比は、私の中で特別な意味を持ち始めた。

革命は、力による権力の奪取、力によって社会を変えていく運動だ。強大な中央集権によって多民族からなるソ連邦の統治を確立したのがスターリンだった。

変える力、運動エネルギーによって人や社会を動かし、統治した体制ともいえる。

一方、ガンジーは社会を動かすエネルギーを全く別の方法で生み出したのではないかと思う。

彼が唱える非暴力は、変える力や運動からは生じてこない。なぜなら、非暴力は、一人一人の人間が自ら変わることではしか実現しないからだ。非暴力は、一つ一つの魂の中から生まれてくるものだからだ。

ひとつひとつの魂に潜在する大きな力

この二人の人物の対比から、私は別のあることを連想した。

それは、20世紀に起きた物理学のパラダイム転換だ。

ニュートン物理学では、エネルギーは運動する物体が持つ運動エネルギーとして捉えられている。

一方、ガンジーとほぼ同時代を生きたアインシュタインによる物理学では、有名な公式 $E=mc^2$ にある通り、物質がエネルギーに変換されること、非常に小さな質量が非常に大きなエネルギーであることが示された。

運動を革命運動に、物質や小さな質量を魂に置き換えてみたら、ちょっとやり過ぎだろうか。

非暴力は、運動ではない。それは、一人一人の魂の中からしか生まれて来ない。

今の人間なら、糸車普及推進協会とか、塩の行進実行委員会をまず組織しようとする

だろうが、ガンジーはそんなことは全く考えなかった。

変えるのではなく、変わること。つまり、一人一人の魂の中での出来事（変わること）がなければ、非暴力を見出すことはできないからだ。

非暴力によって人々は、魂の中に宿る莫大なエネルギーを解放することができる。非常に小さな魂は、非常に大きなエネルギーに変わることができるからだ。

分散した多様な個によるネットワーク

私は、糸車や塩の行進から、分散した多様な個によるネットワークを連想する。画一化した組織という塊を作らず、多様な人々によるネットワークから生まれた大きなうねりが社会を動かしたと思うからだ。

非暴力によって、ひとつひとつの魂が非常に大きなエネルギーに変わり、互いに作用し合い、対話が生まれ、分散した多様な個によるネットワークになって、社会全体を覆っていったのではないかと、勝手に想像している。

実際、糸車も塩の行進も、ガンジーがひとりから始めた。

ガンジーは当時あまりにも有名な存在だったが、理想的には自分が見えない起点になることだったのではないかと思う。

法然が晩年弟子達に戒めとして遺した言葉を思い出す。仲間で集まって塊を作らないこと。非暴力にとって重要なことは、組織の力に依存しないこと、対話的分散というあり方にあるのではないかと思う。

非暴力には、壊して（変える）とは異なる、溶かす（変わる）力がある。

ガンジーが試みたこと

ガンジーが非暴力を通して最後まで試みようとした事とは何か。

私の中に宿り続けてきたこの問いに、私は一つの答えを見出した。

彼が試み続けたこと、それは一人一人が変わることによって世界が変わること、人々が非暴力を試みることによって、一人一人の魂からエネルギーが解放され、共感と目覚めの連鎖によって世界が変わるという確信だったのではないか。

組織化や組織の力によって変えても、本質的に人間や社会は変わらないこと、大きく見れば、それは破壊構築破壊構築の繰り返しに過ぎないことを、ガンジーは誰よりも知っていたのだと思う。

力による現状変更や支配の強化が公然と行われ、暴言や誹謗中傷がネット上を飛び交う今日の世界にあっては、ガンジーが試みたことなど、ただの理想や夢に過ぎないと一笑に付され、相手にされないかもしれない。

実際、インドの独立は実現できたが、それは、ガンジーが試みたインド独立の姿では無かった。彼は、多様な宗教や民族が共存するインドを目指したが、結局はヒンズー教やイスラム教の対立が治らず、分離独立に至ってしまった。

人々が魂との対話を忘れ、組織化や組織力に頼るようになれば、分断や対立は避けられない。

多様性の中の統一を追い求めたガンジーの成功と挫折。それは今の世界においても実現できていない課題、人類が何度も挫折を繰り返しながら、これからも試み続けなければならない永遠のテーマだと思う。

ガンジーは道半ばで凶弾に倒れたが、彼の試みは今も続いている。彼はそれらの試みと共にこれからもずっと生き続けるに違いない。

アサザプロジェクトの30年～私たちが試み続けたことは何か

1995年から霞ヶ浦の再生を目指して取り組んできたアサザプロジェクトだが、これまでに私たちが成就できたこと何か。霞ヶ浦が再生に向かっていると言える程の成果を示すことはできただろうか。

答えは、NOだ。

アサザプロジェクトの30年を今振り返って見て、何も達成できていないと、私は思っている。

延べ34万人以上の人々や霞ヶ浦流域の100を超える小中学校での総合学習の展

開、農林水産業や企業、地場産業、教育機関、自治会、行政などの多様な組織との協働などを見れば、確かに運動の実績として評価されるかもしれない。

霞ヶ浦で国交省と協働で大規模な自然再生事業を実施した当時は、日本で最も成功したNPOと新聞やテレビ、雑誌などで度々紹介された。

しかし、それらの評価の多くは、運動としての規模や広がりに対するものだった。私たちが試みてきたことや、それらの試みが意味することを深く理解し、評価しようとするものではなかった。

また、研究者や専門家による評価や批判もあったが、彼らは自分に関心のある専門分野に該当する部分や要素だけを抽出し、取り組み全体や大きな繋がりを通して見ようとしなかった。

特に批判する研究者に共通していることは、ある部分に問題や欠陥を見つけると、まるで鬼の首を取ったように駄目だと決めつけ、取り組みそのものを全否定しようとする姿勢だ。

ときに賞賛と中傷、世間の評価に振り回されたこともあった。

ただ、はっきりと言っておきたいことは、もし、アサザプロジェクトを評価しようとするのであれば、私たちが試みてきたことは何か、それが何を意味しているのかをまず理解してからにしてほしいということだ。

未完のプロジェクト

この間、私たちが実現できたことも、実現できなかったこともある。持続できた取り組みも、持続できなかった取り組みもある。

霞ヶ浦も社会も、大きくて複雑だ。とても、一筋縄ではいかない。

実際、私たちの取り組みによって、霞ヶ浦が再生に向かい始めた時もあったが、継続はできなかった。

流域各地で様々な取り組みを多様な人々や組織と協働で取り組んできたが、社会に目にみえる変化をもたらしたとは言えない。

部分的な取り組みをいくら重ねても、全体を変えることはできない。もちろん、そんな方法は考えてこなかったが。

全体を力づくで変えようなどと思っていない。非暴力によって、一人一人が変わり、社会全体も変わることを目指し、その方法を模索し続けてきた。

私たちはこの間、様々な仕方で湖全体と流域全体へのアプローチを試み続けてきた。

私は、アサザプロジェクトが運動として評価されることには、関心がない。

ただ、私たちが、具体的に何をどのように試みてきたのか、その試みによって何が起きたのか、何ができ何ができなかったのか、できたのは何故か、できなかったのは何故か、それらの試みの成功と挫折を評価することには、それなりの意味があると思

う。

ある試みを評価するということは、社会や人間に潜在する可能性を明らかにするものだからだ。

すべてのことについて少し知らなければならない。なぜなら、すべてのことについて何かを知るのは、一つのものについてすべてを知るよりずっと美しいからである。

パスカル パンセ 37 より

湖と森と人を結ぶ試みから行政参加の試みへ

30年前、アサザプロジェクトの冠につけたのが、湖と森と人を結ぶという言葉だった。私たちは、この言葉と共に、霞ヶ浦と社会全体へのアプローチを試み始めた。（同時に、霞ヶ浦に関する政策や課題を網羅した行動計画アジェンダを作成し、アサザプロジェクトをその全体の中に位置付けた。1995年2月発表）湖と人を結ぶために始めたのが、アサザの里親募集だった。この取り組みには霞ヶ浦流域の170近い小中学校や多くの市民や組織が参加し、2000年までの5年間で1万人を超える人々が私たちの呼びかけに応えアサザの里親になったり、実際に湖に入るなどの自然再生に取り組んだ。（2004年からは、全国各地の小学校でも地域課題に取り組む総合学習を展開し、霞ヶ浦流域を含め三百校以上で子ども達と試みる学習を行なった。）

湖と森を結ぶために、私たちは、霞ヶ浦の漁協と湖の水源地にある森林組合をつなぐ取り組みを行った。まず、漁協の人たちと魚の棲家となる植生帯を再生するためにアサザやヨシなどの在来水草を植える試みを始めた。湖では荒い波が押し寄せることがあるので、植生帯が侵食されないようにと、木杭や粗朶を使った波消しを協働で設置した。

それらに使った木材は、流域の森林組合に提供してもらった。初めは小規模での実験的な取り組みだったが、目に見えて植生が復活したため、漁協と一緒に、湖を管理する建設省（現国交省）に取り組みへの参加を呼びかけた。（行政参加の試み）

建設省が参加することになり、湖の水源地での手入れ作業によって出る間伐材の公共事業での需要が生まれ、湖の再生と水源林の保全が繋がっていった。

私たちNPOと漁協、森林組合のネットワークに建設省が参加する形になり、アサザプロジェクトが試みようとしていた行政参加の試みの実現した。

行政参加によるネットワークを活かし公共事業を変える試み

行政参加の目的は、縦割りで閉鎖的な枠組みを超えた取り組みを実現することにあ

る。環境破壊や利権構造などの背景にも、この縦割りがある。後で述べる自然のネットワークに重なる人的社会的ネットワークを作っていくためにも、縦割り行政の転換は不可欠だ。

アサザプロジェクトが始まった1995年は、ゼネコン汚職が発覚し全国で公共事業のあり方が活発に議論されていた時期でもあった。

私たちは、縦割り硬直化した公共事業のあり方を変えるために、市民が現場から立ち上げ、多様な分野を結ぶ協働のネットワークによる市民型公共事業を提唱した。

公共事業の制度的な見直しに留まらず、公共事業のあり方を根本から見直そうという提案だった。

市民参加から行政参加への発想の転換を社会に促そうという試みは、まず湖と森と人を結ぶ霞ヶ浦再生事業として動き始めた。

公共事業の中に入って改革を試みた

2000年には、湖の水位管理を生態系に配慮したものに変えるよう求めてきた私たちの要望に応え、建設省が湖水位管理の中止に踏み切った。建設省が中止を判断した背景には、建設省が5年前から参加した漁協や森林組合や学校などによるネットワークの存在があった。

それと同時に、アサザプロジェクトのネットワークと連動した大規模な公共事業（自然再生事業）が始まった。

これは、国内で初めてNPOと国の行政が協働で実施した本格的な公共事業となった。外から公共事業を見て批判する側にいた私たちは、公共事業の中から改革を試みることになった。

省庁の壁を超えて事業を広げる試み

流域の100を超える小中学校が参加し、延べ1万人の子ども達が湖に入り自然再生を行った。私たちが各学校で行った出前授業から始まり、霞ヶ浦産の貴重な水草を育成する学校ビオトープ作り、昔の湖の植生などをお年寄りから聞き取る学習など、これらは全て、建設省の公共事業の一環として実施された。この活動に参加した子ども達は、延べ14万人に及ぶ。

事業の拡大とともに、自然再生事業に活用する間伐材などの供給量も飛躍的に増え、流域の広い範囲で森林の手入れ作業が実施され、多くの雇用も生まれた。流域には森林組合が一箇所しかなかったため、私たちは独自に有限会社を設立して、流域の広い範囲で湖の事業に連携した森林管理を行った。

この事業により3年の間に、実際に霞ヶ浦の広域でアサザやヨシなどの植生帯や生物

相の復活が見られた。

公共事業の中に入って体験した成功と挫折

しかし、これらの取り組みは単年度予算の枠組みの中で実施されたため、2年間で終了してしまった。それでも、これまで縦割りの壁の中で行われてきた公共事業にひとつの風穴をあけることができたのは確かだ。

特に、一つの公共事業から、省庁の壁を超えて波及効果が広がり、一石何鳥もの成果をあげることができるという事例は、財政の効率的かつ効果的な運用（真の構造改革による歳出の削減）に示唆を与えるものになった。

もちろん、私たちは公共事業が抱える多くの問題にも直面し、その中で、自分たちの限界を思い知ることも多くあった。そして、反省点も数多く残った。

確かに、公共事業のあり方を変えることは、そう簡単にできることではない。

ただ、このような試みを繰り返していくことで、確実に公共事業のあり方を変え得てくことができるという実感は持てた。だから、この試みを評価することは、未来社会に向けて意味あることと思っている。

残念ながら、このような事例はその後どこにも起きていないようだが、私たちの試みは、このような縦割りを超えた新たな公共事業が可能だという事例を、社会にそして未来の人々に示すことができたと考えている。

こんなこともできたんだ！という前例を。

自然のネットワーク（水系）に重なる人的社会的ネットワークを広げる試み

2004年からは、湖の中での取り組みに限界を感じ、さらに広大な流域全体へのアプローチを試みるようになった。

湖で起きている様々な問題の発生源は流域にある。湖の問題の解決と再生には、広大な流域に張り巡らされた水系全体を保全再生していくことが不可欠だ。つまり、湖で起きていることは結果に過ぎない。結果が出てからではいくら努力しても、対症療法の域を出ず、根本的な環境改善には至らない。

原因を生み出している流域全体（湖の面積の約10倍）にアプローチしていかなければ、霞ヶ浦の再生はできないのではないか。

私たちは、流域に千以上あるといわれる谷津田の保全再生に取り組むことを始めた。各水系の最上流部には、森に囲まれた谷間の水田、谷津田がある。湧水が豊富なため水はけが悪く、田んぼが小区画であるため、機械化が進まず早い時期から耕作放棄が進み、荒廃した谷津田が流域に数多くある。

水源地の多くが荒廃してしまうと、最下流の霞ヶ浦に大きな影響を及ぼすことにな

る。しかし、広大な流域にネットワーク状に広がる水系・谷津田を総合的に保全再生していくことは、容易ではない。霞ヶ浦での取り組み以上に困難かもしれない。そこで、私たちは流域の自然のネットワーク（水系）に重なる人と社会のネットワークを生み出し展開していくことを試み始めた。

環境への取り組みを、問題解決型から価値創造型へ転換する試み

それが、今日私たちが流域各地で進めている多様な人や組織と協働で行う谷津田再生事業だ。

それは、流域に分散して存在する様々な人や組織、社会要素を結ぶネットワークを作り、谷津田の保全再生を持続的に進めていくための事業や活動を創出していこうという試みだ。

私たちは、谷津田の集落で進む過疎化などの地域が抱える多様な問題や課題（問題群・問題系）と一体化した形で、霞ヶ浦の水源地保全を行う試みを始めた。（付加価値の連鎖を起こし分野を超えた事業展開を実現する試み）

これまでいくつもの企業に参加してもらい、ボランティアによる谷津田再生を地域住民と共に行なってもらい、無農薬無化学肥料で育てた米を使って、流域の酒造会社で日本酒を作る事業を行ってきた。この谷津田再生事業には、延べ3万人近い人たちが参加している。

だが、多くの人々の参加によって行われてきた谷津田再生事業も、流域全体を見ればまだ一部に過ぎない。

2016年には、新たに谷津田再生事業を通して米づくりと販売を行う株式会社新しい風さとやまを設立して、より広範囲の谷津田再生を行う試みも始めた。

しかし、流域全体に保全再生の取り組みを広げていくためには、まだ、何かが足りない。全体的な効果（霞ヶ浦の再生）を生み出すために、何が必要なのか。問いはどこまでも続く。

地域が抱える問題群を結びつけ問題系として捉え、それらの結びつきを価値創造へと反転（マイナスをプラスに転換）させる試み

1997年から提案し続けている逆水門（霞ヶ浦と海との間に造られた水門）の柔軟運用（農業漁業工業の連携によって、海からシラスウナギなどの魚類が湖に入れるように水門を柔軟に管理する）も何度か国会で取り上げられるなどしたが、まだ、実現には至っていない。（水産資源の減少、余剰工業用水の負担、塩害対策など地域が抱える問題群を結びつけ問題系として捉え、それらの結びつきを価値創造へと反転させる＝ウナギ復活による経済効果、余剰工業用水の有効活用、塩害対策の強化など）

湖で増え問題を起こしている外来魚を漁協に捕獲してもらい、魚粉に加工して、流域の農協で有機野菜の肥料に使ってもらい、収穫した野菜を湖が喜ぶ野菜たちというブランドで、流域で店舗展開するスーパーで販売する試みも、原発事故以降中断したままになっている。

それ以外にも、私たちが試みようとしてきたことは、まだ数多く残っている。
また、新たな試みも生まれるに違いない。

私たちの試みは、どこまでも続く

霞ヶ浦も社会も多様で大きく複雑だ。

私は、非暴力によって、これらも全体を結ぶ何かを求め、試み続けていきたい。
私の中で糸車が回り続け、塩を求める行進が続く限り。

非暴力は成長の遅い植物です。しかし、その成長は確かなのです。 ガンジー

2025年8月31日

NPO法人アサザ基金

代表理事 飯島 博